

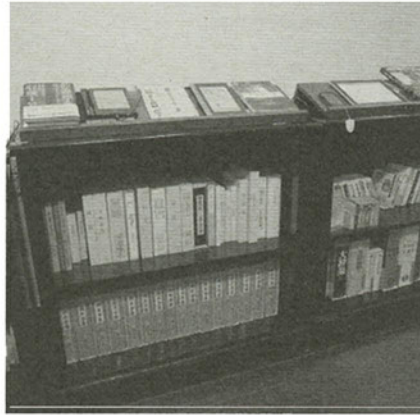
Book Review

# 永江朗の 出版業界事情

## 神保町に電子書籍端末の展示場がお目見え

縦書きやルビにも対応した国際規格EPUB3・0の発表や、アマゾンの電子書籍配信が日本でも開始される見通しとなったことなど、電子書籍まわりが慌ただしい。ポータルサイト最大のヤフーも、今冬中に電子書籍配信を始めるという。一方、電子書籍端末を購入すべきか否か、あるいは購入するならどの機種を選ぶか、迷っている人は多いだろう。

9月末、東京・神田神保町の「本と街の案内所」内に「e読書ラボ」がオープンした。企画・制作は国立情報学研究所連想情報学研究所開発センター、運営は連想検索を活用したサービス「想—IMAGINE Book Search」が知られるNPO連想出版である。



「本と街の案内所」内の「e読書ラボ」

このラボでは、約10種の電子書籍端末を展示していて、来所者が自由に手に取って操作できるようにになっている。しかも、各端末に入っている電子書籍と同じ印刷本も本棚にある。つまり各端末同士だけでなく、印刷本との比較もできる。

また、iPad2（アップル）やリーダー（ソニー）などのほか、家電量販店の店頭では触れられない機種UT-PI（パナソニック）やキンドル（米アマゾン）が並んでいるのは魅力的だ。一口に電子書籍端末といっても、それぞれ表示方式や操作方法に個性（くせ？）があるのが分かる。試しに購入してみるといふレベルの価格ではないので、このような施設はありがたい。

もともと、e読書ラボは単なる電子書籍端末の展示場ではない。「未来の読書を体験できる小さな実験室」を標榜し、辞書事典類の検索サービスを試したり、自動脚注付与システム（文中の気になる言葉に、自動的に意味情報がつく）の展示などもある。電子図書館、青空文庫のダウンロードサービスも準備中だ。もちろん入場は無料だ。